
LIFE AFTER DEATH ~ 死後の人生 ~

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I F E A F T E R D E A T H 〱 死後の人生 〱

【Nコード】

N 2 6 8 6 Z

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

三十路を目前にし、立花 麗子はリストラで会社を辞めた。大学時代からの恋人には浮気を告白され、しかも妊娠を理由に別れを告げられる。

絶望し、自殺まで考えた麗子だが、なんとか思い留まる。しかし、そんな彼女に降りかかる不幸。その結果、滑って転んで頭を打ち、あっけなくも死んでしまった……。

屍と化した麗子の元に歩み寄る黒い影。それは言った。

「もしもし、聞こえますか？ もしもし！」

それは幼い姿をした死神だった。名は命。幽霊となつて目覚めた麗子に彼は言った。

「立花 麗子さん、死神という仕事に興味ありませんか？」
スカウトされてしまった……—。

(1)

とあるマンションの一室。

玄関すぐ横の洗面所から、シャワーの音が絶え間なく聞こえてくる。

曇りガラスの扉の向こう——湯気が充満したバスルーム。

バスタブに、一人の女性が全裸の状態で横たわり、熱めに設定されたシャワーを頭から浴びている。

控えめに染められたダークブラウンの髪が濡れて、肩から胸元にかけてペタリと張りついている。

華奢な身体を伝い流れる湯。栓が抜かれているのでバスタブ内にたまらず、小さな渦を描いて排水溝に流れ込んでいる。

彼女は、その渦を、虚ろな目で見つめている。

微動だにしない瞳。……けれど、ふいに動き、あるものを見つめた。

それは、自らの右手が握りしめている一本のカミソリ——。

非常に薄い刃が取り付けられているそれは、化粧用のカミソリだ。彼女はおもむろに右手を動かし、カミソリを、太ももの上に置いた左手に運んだ。

見るからに鋭利なその刃を返し、手首に近づける。

近づける……近づける……。

目は虚ろなまま。その表情には、感情が見られない。自らの皮膚に刃を押し当てようとしているのに、不安も、恐怖もなく、まるで生きる屍である。

——しかし、

プルルルルッ！ プルルルルッ！

突然、曇りガラスの向こうから機械的な音が聞こえてきたかと思

えば、虚ろなその目に光が宿った。とたん、彼女はハツとし、びくりと肩を揺らした。

「つつっ!？」

直後に声を漏らし、その身と顔を強張らせた。

動いた拍子に切ってしまったのだ、左手首を。見れば、小さな傷が斜めに走っている。わずかに開いた皮膚の間から、赤いものがじんわりとあふれ出した。

血を認識した瞬間、ズキンツ、と痛みが走った。それが彼女に感情を与えた。

怒り。

「クソバカッ!」

目を見開き、両眉を吊り上げたかと思えば、感情のおもむくままに声を荒げて、右手を振り上げ、カミソリを投げた。備え付けの鏡に小さな傷を残し、床に落ちた。

左手首をすぐに口元へと運び、傷をなめ、血を吸う。

あふれ出し、筋状に流れていた血液だが、彼女が身体を起こした際に当たったシャワーですぐに洗い落とされた。

左手首を口元へ押しつけたままバスタブを出ると、右手を伸ばしてシャワーを止めた。床にあるカミソリには見向きもせず、すぐにバスルームを後にした。

洗面所、また右手を伸ばして純白のバスローブをひったくり、素早く羽織った。

まだ出血しており、触れた袖口が赤く染まった。

濡れた髪をそのままに、足早に洗面所を後にする。玄関から続く廊下を奥に進み、その先にあるリビングを目指す。

プルルルルッ! プルルルルッ!

その間も、例の音は鳴り続けている。彼女はその音をたどるように、奥の棚へ移動した。その上には電話機がある。

赤くにじんだ袖ごと左手首を、凹凸おつとつの乏しい胸に押し当てつつ、苛立たしそうに受話器を取ろうとする。だが、髪がぐっしょりと濡れているのを思い出し、代わりにスピーカーホンのボタンを押した。点灯したのを確認し、話しかける。

「もしもし、立花ですが——」

『——麗子れいこ！ やつと出た！』

女性のものでしょうかとされる大声に遮られた。思わず目を細めてしまう音量だ。

『ちよつとアンタツ！ 携帯、マナーモードにしてるでしょ！？』

何回かけても出ないんだから！ まったく、なんの意味の携帯よ！』

口調だけでも不機嫌だとわかる。

「なんだ、絵里えりか……」

電話の相手は知り合いのようだ。それがわかると、彼女は一息ついた。

『なんだとはなによお、私じゃあ不満？』

「いや、別に不満ってわけじゃないけど……」

『けどってなによお、けどって。含みのある言い方ね』

「ああもう、めんどくさいなあ……で、なによ？ なんか用なの？」

『用があるから電話してるんじゃないの！ ……麗子、アンタ、会社辞めたって本当？』

相手の声に若干の重みが増した。

「……ええ、本当よ」

彼女は、一拍間を置いて答えた。

『なんで！？』

「な、なんでって……一身上の都合によりってやつよ」彼女は苦笑を交えて答えた。

『……怒るわよ？』

静かな怒り。

「わ、わかったわよ！ ほら、うちの実家って農家じゃない。私、けっこう遅くに生まれたしさあ、それに一人っ子だし。両親ももう

年で辛いみたいだから、面倒見てあげなきゃいけないって思ったわけよ。だから！」

人は嘘を吐くとき、無意識に右斜め上を見上げてしまうというのが、彼女は、今、まさにそうしながら答えている。

『……本当にい？』

声だけでも疑っているとわかる。

「本当もなにも、嘘つく意味ないし……」

『………ハア。いいわよ、そういうことしておいてあげるわよ。言いたくないんでしょ？ だったら、無理には聞かない。言いたくなったら言いなさいな。愚痴ぐらいはいくらでも聞いてあげるから。独りで抱え込んだじゃダメよ』

「うん……あながと……」

彼女は俯いて、消え入るような声を漏らした。

『ちよつと、なんて声出してんのよ、アンタらしくない……！ あーもう、話題変えよ！ えーつと……あつ、そう！ あれ！ 彼氏とはどうなのよ？ このところ仕事が忙しくて会えてないって言うけど、あれからどうなのさ？』

「真……？ 真とは昨日会ったよ。いつものカフェでお茶した」
彼女は微笑みを浮かべた。

『あら！ あらあらあら！ そう、良かったじゃん！ ……で？ 会社辞めたこと、もう言ったの？』

「あー……いや、ううん、それはまだ……」

『そう……早い方がいいわよ。言いくいかもしれないけどさあ』
「うん、そうだよねえ……」

『あつ、そうだ。そのときに、ついでにプロポーズしちゃったら？ 会社辞めたついでに家庭に入っちゃうのもいいんじゃない？ 今なら寿退社みたいなもんだし』

「アハハ、それもいいかもね」

『待っていてもダメよ、今の男は草食なんだから。それに、今は女からプロポーズをする時代なんだってよ』

「なるほど。考えてみようかな——」

そのとき、スピーカーの向こうから、ジャアーツ、と水の流れる音がした。

「——ちよっ、アンタ、今どこにいの……？」

『どこつて、トイレに決まってるじゃん。じゃなきゃ、こんなに長い間、私用電話なんかかけられないわよ』

「汚いなあ……」

『清潔ですう！——あ、ところでさあ、もうすぐ定時だけど、今日飲みにかん？』

「えっ、今日……？」

『大丈夫よ、聞かないから。気晴らしに飲んで騒ぐだけ。いつものところこうよあ、美味しいのどぐろ出すところ！その後、ちよっと前に見つけたニューハーフの店に行つてさあ、オッパイ、揉んじゃおうぜえ！』

嬉々とした声。

「セクハラ親父か、アンタは……」

彼女は呆れた顔をした。

『ねえ、行こうよあ。一緒に二日酔いになって苦しもうぜ！』

「どんな誘い文句よ……うん、わかった。いいよ、行く」

『よっしゃ！じゃあ、居酒屋で待ち合わせね。後に着いた方が、ボトル新しいの開けるのよ』

「え、それって、私の方が有利じゃない？」

『だから、おごつてやるって言つてんのよ。察しなさい。あ、でも、ボトルだけよ』

「わかつてるわよ」

『ハハハッ。じゃあね』

「うん、じゃあ……」

『ブツン。ツー、ツー、ツー……』

スピーカーから電子音しか聞こえなくなると、右手を伸ばし、一度受話器を取つてすぐに戻した。……音が途絶えた。

とたん、棚に手をつき、寄りかかった。前かがみになり、大きなため息を吐き出した。

「……いつそ愚痴っちゃった方が楽だったかなあ……」

彼女はぼつりと呟いた。胸に押し当てていた左手を離し、見る。赤黒く染まり、汚れた手首。それなりに出血したようだ。すでに血は止まり、固まった血で傷口もふさがっている。

それらを見つめ、彼女はホツとした。……だが、一転。安堵していた目が凄みを増し、再び怒りに満ちた。

「なにを考えているんだ！ 私は！」

声を荒げると、同時に右手を振り上げて、目の前の壁を拳で一撃した。

「バ力過ぎる……意味がわからない！ こんなこと、するなんて……」

……」

憤慨している。

荒々しく自分を貶したかと思えば、また一転。今にも泣き出してしまいそうな顔をし、壁を叩いていた右手で後ろ髪をぎゅっと握り締めた。

絞り出された水滴がフローリングに散乱した。

「………出かける用意しなきゃ」

長い沈黙の後、バスローブの長い裾で落ちた水滴を拭いつつ、きびすを返した。

来た道を引き返す。その際、道中に落ちていた水滴も拭った。

「これ、さすがに無理かなあ……」

洗濯機の前でバスローブを脱いだ。右手で掴み、放り込もうとするが、ふと思いつき留まる。赤く染まった胸元を見つめ、残念そうな声を漏らした。

洗濯機に入れるのをやめて、横にあるゴミ箱に突っ込んだ。

開けっ放しにしてあった扉をくぐり、再びバスルームへ。落ちていたカミソリを拾い上げると、バスローブを突っ込んだゴミ箱に投げやった。

扉が閉められてまもなく、シャワーの音が聞こえてきた。
「いったあつ！　しみるうゝ……！」
そして、声も……。

(1) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。
様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら
助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2686z/>

LIFE AFTER DEATH ～死後の人生～

2011年12月9日17時52分発行